

木野 実さん

往年のスーパースターが 謙虚に学び高みをめざし続ける

国 内でも年々浸透し、世界ではパラリンピック種目に、という動きもある車椅子ハンドボール。

本誌でもこの競技のバイオニア・小西博喜さん（日本車椅子ハンドボール連盟名誉副会長）による寄稿やスポーツライター・久保弘毅さんによるリポートで、車椅子ハンドボールの魅力をコンスタントにお伝えしてきた。

この小西さんからアプローチを受け、大会に通ううちにすっかりこの競技に魅せられたのが木野実さん。

平成、令和のハンドボーラーには縁遠い人かもしれないが、かつては「ミスターハンドボール」と呼ばれ、ミュンヘン（1972年）、モントリオール（76年）と2度のオリンピックに出場したスーパースターだ。

日本ハンドボール協会常務理事として活躍していた時、高校時代から旧知の小西さんに誘われ、日本車椅子ハンドボール競技大会を見に行ったのがこの競技との出会い。

「こういう競技もあるんだ」という新たな発見に心を躍らせるとともに、障がい者と健常者が同じコートでプレーしたり、倒れた障がい者がスタッフの手を借りることなく自ら立ち上がる姿に、おおいに驚かされた。

「障がい者の方々も『訓練すればこうなれるんだ』という思いとともに、スポーツを超え、障がい者のみなさんの強さや生命、魂を感じました」と木野さん。

「いかに自分の人生がよい加減だったかとも思い知りました」という。

以降、日本協会常務理事退任後も日本車椅子競技大会に駆けつけ、車椅子ハンドボールとの縁を深めていった。

縁の深まりとともに日本車椅子連盟の役員となり、さらには小西さんのあとを受け継ぎ、2016年からは会長に就任。

車椅子ハンドボールの普及、発展に尽力し、18年からは現在の日本車椅子連盟・スーパーバイザーを務めている。

障がい者スポーツと向き合い 新たな境地を切り開く

障がい者スポーツ界では、1人で複数の競技に力を注いでいるアスリートが少なくない。

ルールさえ覚えれば、どの競技にもチャレンジできる。

「障がい者のみなさんがやりたいスポーツをできるように。そうしたチャンスを提供したい。

部屋の中に閉じこもるのではなく、外に出ることで視野も広がる。

車椅子ハンドボールが、その一助になれば」

日本車椅子競技大会などでは、運営のお手伝いで参加した小・中学生が、休憩時間に車椅子に体験乗車することも。

「子どもたちからは『おもしろい』という声とともに『車椅子の人たちは、とても大変だね』といった声が聞こえてきます。

子どもたちが実際に車椅子を体験することで、障がい者のみなさんのつらさ、痛み、不自由さをじかに感じる。

「人にやさしく」といった言葉だけの道徳の授業よりも、実際に体験したほうがより子どもたちの心に響き、障がい者のみなさんとの相互理解にもつながるのではないだろうか」

車椅子ハンドボールを通して、ダイバーシティー（多様性）やインクルージョン（包括・共生）の理念を共有し、実現をめざしていく。

そのために木野さんは「車椅子ハンドボールを普及、発展させていきたい」と意欲をにじませる。

現役選手や指導者、勤務先の湧永製菓の社員、日本協会の役員。

いずれも持ち場で全力を注ぐとともに、立場や年齢にこだわらず、気さくに人と接してきた木野さん。

先人の声に耳を傾けたり、教えを請いながら、車椅子ハンドボール、障がい者スポーツの世界でも人脈を広げていくとともに、障がい者スポーツコーチ、中級障がい者スポーツ指導員といった障がい者スポーツの公認資格も取得して、競技と向き合った。

「ハンドボールの現場でもフィジカルトレーニングやメンタルトレーニングなど、どんどん新しいトレーニング、考え方が入ってきて、進化しています。

やはりずっと勉強し続けなければいけませんね。

障がい者スポーツに関わることで、いかにいい加減に知ったかぶりして過ごしてきたかがわかりました。

このトレーニングはこういう意味だったんだと改めて感じたことで、講習会などに出向いてのハンドボール指導もより楽しくなりました。

従来は短い言葉がけで終わることがほとんどでしたが、今では小学生、中学生、高校生、大学生、社会人と、カテゴリーごとによりモチベーションアップにつながる言葉がけをするようになりました」

車椅子ハンドボールに関わることで、多くの刺激を受け、原点を見つめ直し、自身の幅を広げることもつながっているようだ。

目の前にあるハードルにも ポジティブに立ち向かう

日本代表選手として世界の大舞台に立ってきた人だけに、現状の限られた空間で満足するのではなく、新たな刺激を求め、精神的に海外に目を向けたり、広い視野で行動するのも木野さんならではの。

2019年4月からは国際ハンドボール連盟（IHF）のウエルチエア（車椅子）・ワーキンググループの一員に。

「IHFは本気ですよ。国際パラリンピック委員会（IPC）と連携して、2028年、ロサンゼルス・パラリンピックで公式競技として採用されることをめざしています」



「日本をはじめ、世界での車椅子ハンドボールは6人制で行なわれていますが、ブラジルなど中南米では4人制が主流。GKも攻撃に参加するので、つねにOFが数的有利な状態。とても激しく、かつ、おもしろいですよ。（21年）11月のIHF総会では、4人制も承認されました」

「パラリンピックでハンドボールは実施されていませんが、ろうあ者によるデフリンピックではハンドボールが夏季大会の公式競技で、2017年のトルコ大会でも実施されています。

知的発達障がい者のスペシャルオリンピックスでもハンドボールは夏季大会の公式競技です。世界ではいろいろなハンドボールが行なわれているんですよ」

ボルテッジを上げながら、熱っぽく多様な障がい者ハンドボールを語ってくれた木野さん。

「一気には進みませんが、国内でもこうした多様なハンドボールができる素地は作っておきたい。多くの人が、スポーツを楽しむチャンスをもつて作れたら」

そんなビジョンに向かって前進していく構えだ。

未来に向けては課題も少なくない。小西さんが土台を築いた関西などと比べると、木野さんが暮らす関東での車椅子ハンドボールの普及はまだまだの状態。国内の人口比などから見ても、関東での普及は急務だ。

また、現在、車椅子ハンドボールの国内ルールは、1チーム、コートでプレーする6人のうち、少なくとも1人が障がい者または女性とされている。

障がい者と健常者がともに楽しむという要素に満ちてはいるが、IHFが主催する世界大会（21年は延期）、パラリンピックでの実施が実現すれば、障がい者だけでチームを組む必要がある。

そのためには、障がい者だけのトップチームの強化と従来の共生型で楽しむ「2本立て」（木野さん）での運営も必要になってくる。

日本車椅子連盟スタッフも本業で多忙を極めるなど、ハードルは高いが、木野さんは意欲にあふれている。

「何事も一歩を踏み出すかどうかが大仕事。1回行けば大きく変わってくるので、さまざまなノウハウを持つ諸岡晋之助さん、岡田美優さん（101ページ参照）らの力も借りて世界の大舞台にも車椅子代表チームを派遣したいですね。

IPCが作っている教材に書かれている言葉ですが、『Impossible』（不可能）に『・』のアポストロフ（イ）を加えるだけで『im possible』（私は可能だ）になります。ポジティブに前進していきたい」と、木野さんは現役時代と同じく、高みに挑み続ける。

— PROFILE —

きの・みのる 1945年12月5日、大阪府生まれ。寝屋川高（大阪）で大西武三さん（元・筑波大監督）らとハンドボールを始め、立大、全立教、湧永製薬（現・湧永製薬）で活躍。ミュンヘン、モントリオールと2回のオリンピック代表、世界選手権にも3回出場した。全日本男子ジュニア、湧永製薬の監督も歴任。97年の熊本世界選手権では日本協会広報担当理事としてメディアオフィサーを務め、湧永製薬退職後も環太平洋大学男子部監督、京大男子部監督など幅広く活躍してきた。現在、日本車椅子連盟スーパーバイザー。情熱あふれる同連盟・豊田昌夫会長らとともに、車椅子ハンドボール、障がい者スポーツの普及、発展に尽力している。